

言葉と肉、あるいは石

杉山 恵子

かつて（正確に言えば、私にとっては、1963年から73年までの間）、たねの会で椎名さんの言葉を何度も聞いた。たねの会は、初め銀座教文館九階の遺愛室でもたれていたが、後に青山学院のウェスレーホールに移った時期もあった。月一回の例会、その他、小説部会、演劇部会、評論部会という分科会が毎月行なわれていた。

すでに心筋梗塞の持病が悪化した状態であったにもかかわらず、椎名さんは時間と体力の許すかぎり積極的に会にでてこられた。小説部会は実践の場で、十枚原稿と称する短編を各自が持ちより、みんなの前で自作を朗読するという形式がとられていた。ここで語られた創作に関する批評は厳しかった。何よりも作者のモチーフの強さ、深さが問われていた。

例会では、当時話題になっていた出版物や上演された演劇などがとりあげられることが多かった。そんなときみんなの語る言葉のなかに、私はいつもある種の違和感を感じていた。それは椎名さんの語る言葉を、みんながそのまま踏襲して使うときに起こるのだった。椎名さんが語るときには、たしかに彼の語る言葉なのである。しかし、「二重性」「絶対化」などという言葉がそれぞれの舌で語られると、なんだかみんな似合わない衣服を着せられたようなぎこちない語りに陥ってしまうのだ。なぜ、同じ言葉であるにも関わらずこれほど重さが違うのか、それは私にとって長いこと謎だった。

今回、客員研究員の仕事をお引き受けするにあたって、自分の研究として私は二つのテーマを提出した。それは、椎名文学の現代性

を世界文学のなかで問うことと、もう一つ、たねの会当時の椎名さんに関する資料収集の一環として、自分の当時のノートから、椎名さんの語った言葉を取り出してみようと考えたことだった。いわば、当時のたねの会の会員の方々をも網羅して、後期の椎名さんの言行録のようなものが作れないだろうかと考えたのである。後者の案に関しては、椎名研究のグループの方々も大いに乗り気になってくださった。

研究所の席に坐るようになって一ヶ月余り、当時の他のたねの会の会員の方々のその後の文章を読むようになってから、私は今度はまた妙な戸惑いを覚えるようになった。多くの方々が、椎名さんの語った言葉を引用して書いておられる。そうした言葉は、多くの場合私も同時にその場にいたことがあるから、聞き覚えている言葉である。ところが、あのときあれほど身に添わないと思われていた言葉が、今度はすっかりそれぞれの着丈にあう言葉に変わってしまったのである。たしかに、椎名さんの語った言葉でありながら、そうではない、同時に、今それを書いている方の言葉となってしまうのである。

もし、その言葉をそこから外して言葉だけを独立させようとしても、そんなことはもうできない。



ふとそれは、私に石に描かれた絵を思い出させた。(なぜ、カンバスではなくて石なのかは問わないでほしい) この石から描かれた絵を剥がそうとしても、その絵は損なわれてしまうだろう。たとえその石が今の自分自身でしかないとしても、描かれた石であるよりほかに、その存在価値はないのかもしれないのだ。語られた言葉とは、一体何だったのだろうか。かつて傲慢だった私にとって、この謎は逆にいっそう深まるばかりなのである。

(すぎやま けいこ キリスト教研究所客員研究員)